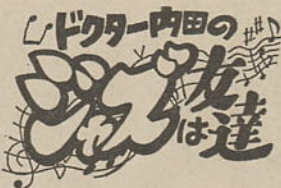


渡辺貞夫のクラブで

六月下旬の日曜日、東京に
行く。毎年この季節にオー
ンする渡辺貞夫の「ザ・クラ
ブ」(昨年までの「クラブ
クラブ」だ)を聴くためだ
が、例年通り詩人でジャズ評
論家の清水俊彦さんとキター
の高柳昌行と一緒に頂
く。いつもはこれに宮沢昭が



加わるのだが、浜松に転居し
た上、現在九州にツアー中な
のだ。この人たちは、貞夫が
最も心を許す友人たちだか
ら、ホスト役で忙しいのに料
理に気をくばったり、会話に
加わったりしてくれるのがど
てもうれし。

つい先日、五十枚目の作品
を発表したばかりの貞夫は、
新聞でのインタビューで、
「僕の音楽のルーツは若い」

る夢中でやってきた。バツ
プ。ただアフリカやブラジ
ルによってバツプだけの世界
ね)で曲づくりにほけむ彼ど
時を過ごしたりしたが、何よ
りもたまらなく感動的だった
るかのようには燃え上がって、

完ぺき追求する激情家 菊地雅章に会う楽しさ

から目を開かれて気分をオー
プンにできたと思う。でもあ
えてジャンルでいえば、僕は
「フュージョン」よりも、あ
くまで「ジャズ」であった
い」。音楽はもう国籍にこだ
わる時代じゃない。僕は僕の
音楽をやるだけ。その言葉通
り、その夜はブラジルのトッ
キーニョのグループに溶け込
んで、森林の中にもニユアン
スに富んだ音楽を聴かせて心
なごむ一夜を過ごすことがで
きた。

物かげで涙する姿も

ところ、昨年の「クラブ
クラブ」に貞夫が招いたの
は、菊地雅章率いる「フキ・
バンド」だった。僕もちろ
ん上京し三百間菊地と隣り合
わせたホテルに滞在して一緒
に食事したり、キーボードや
オーデイオを所狭しと並べた
部屋(「東京ヒルトン」なの
によく許してくれたと思う
わってトリオとなるや、次第

にそのブレに熱中し、つい
には一人を叱咤(しつた)す
るかのようには燃え上がって、
で活躍中のピアノリスト高瀬
アで寝泊まりした彼の長い髪
の毛が、あちこちに残ってい
るのを見つげると、何とも胸
が痛くなるような寂しい気分
になってしまったねえ。
「一難しそうなブーさんが
度々長逗留(と)留するぞう
ですが、よくも平気です
ね」。「ふだんの彼は、優し
く(こまやかな)心くほりときれ
い好きな性格だから、何日
も活躍中のピアノリスト高瀬
アと裏返しになっている。恥す
かしがりやかもしれないね。
それよりも、スタジオのソフ
アで寝泊まりした彼の長い髪
の毛が、あちこちに残ってい
るのを見つげると、何とも胸
が痛くなるような寂しい気分
になってしまったねえ。



ドクターズスタジオにある菊地雅章の写真

これが仲間うちのお祝い席
でも全然気にもならないんだ
の音楽とは信じられない真
よ」。面白いことには、帰っ
たあと、スタジオに飾ってあ

まもなく日本へ来る

そのブーさんが、間もなく
「フキ・バンド」とともにこ
ともしも日本にやってくる。お
まけに八月半ばからは、一人
居残って、名古屋の「ラブリ
ー」をはじめ、この地方でだ
けソロピアノのコンサートを開
くことになっている。ニユ
ーヨークでは常に視点を未来
に向けて、衝撃的な傑作「フ
スト」や、シンセサイザーを
駆使した新作を発表してきた
菊地雅章が、実験的でありな
がら極限に達した美しさに輝
く創作活動にひとくぎりをつ
け、再びジャズの原点である
ブルースとアコースティック
の世界に戻ってきた。まさに
古くからの信条である「再確
認と発展」なんだろうねえ。

そんな安らぎの彼に会えるの
が本当に楽しみなのだ。
(内田 修)